卒業生紹介

新たな将来の夢　～子どもに語りたい仕事の大変さ、楽しさ～

Numata Miyuki
沼田　みゆき

帝人株式会社
技術本部　情報分析班

神奈川県出身
2001年　生活科学部生活環境学科
　　生活工学講座 卒業
2003年　大学院人間文化研究科
　　ライフサイエンス専攻
　　博士前期課程 修了
同　　年　帝人株式会社入社

沼田みゆきさんは、生活科学部生活環境学科生活工学講座を卒業後、大学院ライフサイエンス専攻博士前期課程に進学し、修了後、2003 年 4 月に帝人株式会社に入社した。沼田さんにとって、帝人は、最初に入社を希望するエントリーシートを送り、最後に研究職として内定が出た会社だった。当時、沼田さんは、研究職にこだわらず就職活動を行っていて、研究職として帝人に入社するかどうかを最後の最後まで迷っていた。帝人に入社を決めたきっかけは、沼田さんのお父様と修士論文指導教員の言葉だった。「医薬品の分析の仕事に携わっていた父は、新しい製品を作りだすことができるのはメーカーの研究者の醍醐味だと教えてくれました。そして指導教員の先生は、研究以外の仕事は研究職として就職した後でもできるとアドバイスを下さいました。そこで、研究職として新しい製品を世に出すこと、そして将来的には研究だけではなく、幅広い視野で物事を考えられるようになりたいという目標を持ち、帝人へ入社することに決めました。」と、沼田さんはこの時のことを振り返っている。

2003 年に帝人へ入社後、愛媛県松山市にある帝人の研究所で、繊維の基礎研究に従事することになる。生まれて初めての一人暮らしで、しかも同期入社の中で愛媛に配属された女性は一人だけ。この環境で仕事を続けていけるのだろうかと、沼田さんは不安の連続だったが、次第に環境に馴染んでいき、自分の裁量で研究を進められるようになると、仕事に楽しさを感じるようになっていった。

商品化へのステップ

2006 年、入社当時から研究開発していた目標の繊維が、商品化のフェーズへと進むことになる。沼田さんは、今までと同じように研究だけをしていればよいのではなく、関係部署の人たちと議論し、また市場で求められているニーズを調査する必要に直面した。工場の生産部門や繊維から織物・編物にする加工部門の人たちと、開発した繊維の特徴は何か、どうやったら特徴を活かせるかを話し合い、また一方で、営業部門の人たちと商品に興味を示して下さるお客様のところへ伺って要望を聞いて回り、市場ニーズの収集を行ったそうである。多くの人たちと議論を重ね、どのようにしたら開発した繊維ならではの商品ができるのかを模索する日々となった。そしてその結果、「ナノフロント(NANOFRONT) ®」として商品が上市され、2008 年には“毎日を変えるナノテク素材「ナノフロント」”として第 35 回繊維学会技術賞を受賞することになる。この商品化の過程は、社内外を問わず様々なバックグラウンドを持つ人たちと一緒に議論しながら商品を作り上げることの大切さと楽しさを体感する、沼田さんにとって大変貴重な経験となった。「ナノフロント(NANOFRONT) ®」とは、直径が 700 ナノメートルで、1 本の糸の断面積が髪の毛の 7500 分の 1 という、超極細ポリエステルナノファイバーである。現在、高い摩擦力による「滑りにくさ」を活かして、ゴルフ用手袋やソックスなど幅広い用途で使われている。

出産そして育児と仕事

沼田さんは、松山で働いている時に結婚し、出産、子どもが7か月の時に職場復帰した。「仕事が順風満帆の時に、結婚し、子どもを持つということは、仕事をやめざるをえないことになるのではないか」と、沼田さんは当初思っていたが、そのような時、上司が「たくさんの責任は、人生を豊かにする。変化に臆することなくチャレンジしなさい」と言って背中を押して下さったそうである。沼田さんは、その後も恵まれて二人の男の子の母となる。二人の男の子の子育ては想像以上に大変で、朝 7 時頃子どもたちと別れ、夜 7 時頃保育園に迎えに行き、ご飯を食べてお風呂に入るともう寝る時間という毎日となった。子どもたちにいつも寂しい思いをさせているのではないかと思いながらも仕事を辞めずに続けてこられたことを、沼田さんは次のように語ってくれた。「応援して下さる会社の方々、仕事に理解を示してくれる主人、日ごろからお世話をしてくれる両親、そして『がんばってね』と言ってくれる子どもたちに支えられているからこそだと思っています。いつの日か子どもたちが大きくなって社会に出る時に、母が会社でどんな仕事をしてきたかということや仕事の面白さを話してあげられたらと思っています。」

研究職からの転身

研究の世界を 10 年以上続け、もっと視野を広げてみたいという思いを持っていた矢先に、沼田さんに異動の話が飛び込んできた。現在行っている研究開発が市場に求められているかどうかを調査する新設の部署とのこと。市場ニーズの収集が商品化に非常に重要であるという経験をしていた沼田さんは、研究以外の視野を広げることができるという期待をして、本年 4 月に異動した。「新しい組織のため、日々試行錯誤の連続ですが、これまで培ってきた研究者としての視点を忘れずに、取り組んでいきたいと思っています」と、抱負を語ってくれた。

インタビュー・文責：仲西　正
（基幹研究院自然科学系教授）

わたしのオフタイム

お宮参りや七五三には着物を着てお参りをして和を忘れないように心掛けている。子どもが大きくなってきたので、これからは大好きな歌舞伎鑑賞を再開したい。